

健康文化

「健康づくり」と私

玉木 武

早いもので、2年4カ月お世話になりました愛知県から、厚生省へそして防衛庁の衛生担当参事官に就任して5カ月が経ております。分きごみの仕事に追われる日々が続くこともあった愛知での日々は充実した楽しいものでした。改めて今、愛知で私を支えてくれていた方々に対する感謝の気持ちが溢れてまいります。

さて、今や日本は名目上(?)世界一の金持ち国と言われるようになり、飽食社会、車社会、ストレス社会にもかかわらず、又世界一の長生き社会となり、「健康づくり」は、中年を迎える大部分の人々の座右の銘となってまいりました。

「健康づくり」という言葉が、厚生省より世に間われたのは昭和53年からです。それまで「体力づくり」という団体が、総理府系の財団の一つにあり、市町村の教育委員会を中心に「社会体育」の一つとして活動していました。実は、当時、健康「つくり」か「づくり」かで議論がありました。時の健康政策のまとめを命ぜられていた栄養課長の私が、西日本では「つ」はこのような場合濁るのが普通(?)と決断したのが、この用語でありました。

国の厚生行政は、消化器伝染病や結核など感染症対策から始まり、食品や環境の衛生、医療行政、福祉や年金、医療保険などへの行政へと拡大していきましたが、地味ながらも保健予防の行政は、一つの行政分野として確立してまいりました。特に、母子保健や栄養などの行政には、それらの行政の発足当初から色濃く、その傾向が出ています。

ところで、私はこの健康に関する行政に、誰よりも深くかかわってきた一人であったとの思いを新たにしています。その窮極(?)は、何と云っても愛知県で健康の森推進に関与できたことでしょう。

厚生省での最初の仕事は、上水道の衛生管理でした。昭和39年12月からです。そこで良質な水道源水の確保に必要な、河川の水質基準をきめることに着手しました。ところが時の環境衛生局長が、厚生省の方でも河川を汚染する処

理施設を管轄する課がある、ということで、この水質基準は幻の基準に終わりましたが、各省庁はそれを知らず経済関係省ではこの基準におそれをいただいたものです。これは、一部の生活環境への“健康づくり”のころみでありました。

次に、母子衛生を担当しましたのが、県の課長や難病対策などの行政を経た昭和48年8月からでした。わずか11カ月でしたが、自分自身多くの勉強をした思いです。その中心は、時の課長の命による母乳育児推進の仕事でした。乳児のみならず幼児、児童になっても、母乳育児とそうでない子供とでは、肉体的、精神的にも健康さが異なることをアピールするものでした。

健康づくり元年は、昭和53年度となっています。私は、その前年の8月から栄養課長となり、健康づくり行政を担当しました。その柱となるものは、(1)生涯を通じて健康づくりを、とした生まれる前から老後まで切れ目のない健康診断の実施。(2)健康づくりの基盤整備として、健康増進センターや市町村保健センターの整備とそれに関係するマンパワーの配備。(3)健康づくり思想の普及啓蒙として、健康づくり振興事業財団の設立とTVや新聞などを通じての国民へのアピール、などでした。TVでは、毎週土曜日午前中15分番組を企画し、中京テレビがキー局となって全国に放映しました。その初代のキャスターとして、芥川竜之介のお孫さん(やすし氏の娘さん)を起用することにきめたのも私のときでした。それ以来中京TVとは、仲よしさんの中です。

その後、愛媛県の部長に出ましたとき、食生活改善推進員(保健栄養推進員ともいう)の活躍の場を作り、楽しいおつきあいが出来ました。このグループは、その後の地域活動で保健文化賞(厚生省、第一生命)をもらっています。

愛媛から帰京後担当しました結核成人病課長は、僅か8カ月ばかりでしたが、このとき、老人保健法にとり入れられる健康診断のあり方を予算化する機会に恵まれました。時の大蔵省主計局の主査(各局課の予算チェックする責任者)は、名古屋の高校から東大法を出た人で、今でも親しくおつきあいしています。

食品保健課長は、最長不倒距離の3年間に及びました。ここでは健康食品協会(財)を作るべく、農水省との熾烈な戦いをしたものでした。普通、一般の食品は健康の保持や増進には欠かせないが、健康食品と称されるもののうちにはしばしば不健康をもたらす食品がある、という観点に立って、財団作りをやりました。その財団の評価、諮問委員会には、八木国夫先生も無理やり入って貰っています。この職にいる間に、辛子レンコンからのボツリヌス中毒事件や、

オーストリアの不凍液入りブドウ酒事件もありました。

国立病院（約100カ所）や国立療養所（約160カ所）の再編成問題が具体化してきたのは、昭和60年に入る頃です。約30%を自治体や大学などに移譲又は国病、国療の統合により減らしていくという考え方です。これは基本的には、わが国の医療需要に対応できる、高度で幅広い国立の病院を再構築したいという考え方に基づいたものでありました。少なくとも、国立病院課長として、私はその方針で臨みました。移譲、統合対象の国立病院の大部分は黒字の病院で、経営上の問題をもつものではなかったからです。全国に、適正に配置された再編病院のベッドの増、医師・看護婦等の増員、病院の新改築による高度機械化など、自治体にとっても大変な朗報になる計画でしたが、消費税と同じく(?)、説明不足の非難をまぬがれ得ないものでした。

昨年末、ついに、待ちに待った国立長寿科学研究センターの設置場所が、愛知に決まりました。鈴木知事を始め、県議会、県医師会も含め、政財界あげて誘致に努力された結果です。厚生省の期待も大変大きいと思います。長寿科学研究振興財団も県の出捐金により、昨年船出しました。しかしこれからが大変です。健康の森構想の具体化が国により求められるからです。今までは、愛知県の種々の政策やイベントの展開には、各県は冷淡でした。それは各県の多くは知らなかったからです。他県のように愛知県は、これみよがしに新しい政策をやっていかないからです。しかし今後は違います。全国が、健康の森構想を知り、長寿研が愛知に決まったことを羨み、その推移を注視しています。

このことは非常によいことだと思います。必ず各県が、よい智恵を貸してくれるでしょう。全国にその計画が知られたことは、各県が関心をもち、大なり小なり各自の県でも類似の計画を考えていくものです。それらの情報が伝えられ、参考になる場合が多々でてまいります。

この様な計画には百家奏鳴が必要であり、またそれらをまとめる気力と智力のある天才が必置となりましょう。

愛知には大変多くの産物があり、その多くは全国有数の質を誇り、星もあります。例えば、酒も、お茶も木材も、菓子類も。しかし全国の多くの人々は、それを知りません。それはそれで一つの愛知の生き方です。しかし今、華やかに宣伝している大阪の花の万博、昨年の世界デザイン博で、あの10分の一もPRするものがあつたかどうか。幸いデ博も成功裡に終わったこととなつてよかつたと思いますが、ここには名古屋市の総力を挙げてという考え方が中心で、世

界博といいながら、横浜博や博多博のような地方博の一つであり、世界博的な東京、大阪などの衆知を求める方法が不足していたことは否めません。

愛知は、現在世界をみて、わが身をふりかえる姿勢に移りつつあります。世界に知られた愛知になろうとしています。

この長寿科学研の誘置と共に、健康の森の推進を通じて、種々のことに関して愛知盆地からの脱却が、県行政、政財界、学会、各種団体に求められているように思えてなりません。

私には、これから益々健康問題に関与する道が待っているように思います。また健康に通ずる道を歩む必要があると考えています。現在の仕事は、25万人余の自衛隊員の保健、医療、衛生に関することです。陸、海、空の三幕（軍）に昔流にいう将補の軍医総監（少将）がいますが、それをまとめ、調整する機能を持たされています。世界的軍縮の流れの中で、自衛隊内でも後方支援機構の整備として、住宅、宿舎、体育館、医療施設等の整備に目がむけられています。

有名なエアロビクスは、米国の海軍軍医クーパー博士が、艦上勤務員に体力がない、循環器系の病人も少なくないところから考え出した健康づくりの実践方法です。私が、厚生省の人間として初めてクーパー氏に会ったのは昭和54年の春でしたが、自衛隊の中でもこの「実践」が有用なものなのか、またそれを通じて国民にも参考になるものがあるのか、今後の課題として行政努力してみたいと考えています。

国民の健康は、その国の文化の程度に左右されることが多く、また文化はその国民の健康度により、より大きく進展するものと考えています。その道標の一つとして、当財団の活動が評価される日の早からんことを祈念して筆をおきます。

（防衛庁参事官）